

## 彙報

### ○早稲田大学史学会・連続講演会

#### 「わたしと歴史学、わたしと考古学」

(於文学学術院校舎)

第一回 二〇一四年六月四日(水)

史料との出会い、学問との出会い

寫田 修(日本史)

中国古代の天文・占術と文化

小倉 聖(アジア史)

「スロヴァキア史」を研究する

井出 匠(西洋史)

私と考古学―古墳を調査する―

今城 未知(考古学)

第二回 二〇一四年六月九日(月)

私と歴史学―出会いとその面白さ―

高橋 央(日本史)

朝鮮古代史から見えること―七世紀

後半の新羅・唐関係の研究を通じて―

植田喜兵成智(アジア史)

アルプス環境史への道程―登りながら

考えたこと― 渡邊 裕一(西洋史)

東南アジアを歩く、掘る、考える

深山絵実梨(考古学)

#### 趣旨と経過

甚野尚志

二〇一四年度の早稲田大学史学会連続講演会「わたしと歴史学、わたしと考古学」が、六月四日(水)と六月九日(月)の二日にわたって開催された。この企画は、これから専門を選ぼうとする一年生に歴史学と考古学の学問の内容について知ってもらい、関連するコース・論系への進学を決める際の参考にしてもらうことを趣旨にしている。すでに二〇〇一年度より開催され、今年で第一四回目の開催となった。二〇〇一年度の当時は、専任教員が講演を行っていたが、二〇〇三年度の第三回より、助教、助手、非常勤講師や大学院生などの若手研究者が歴史学、考古学の魅力やその学問の意義について話す形式となり、本年度も日

本史、アジア史、西洋史、考古学の各コースから若手研究者二名ずつが推薦され、みずからの研究にもとづいて講演を行った。

各講演で扱われた内容は、時代も地域も多岐にわたっているが、そこに共通するものは我々の現在の基盤となった過去への関心、人類の来歴への関心といってよいだろう。講演のなかには自身の専門研究を詳しく紹介する話があれば、史跡調査や発掘調査の経験を裏話も含めて楽しく語る話もあった。すべてが同じような形式で語られたものではなかったが、それぞれの講演者が熱意をもって語る姿に、一年生の学生たちは生き生きとした表情で聞き入っていた。通常の授業では感じられないほどの熱気があり、これからのような専門を選んだらよいのか、学生たちが真剣に考えている様子が伝わってきた。また講演の終了後には、多くの学生が熱心に講師に質問をしていたのが印象的であった。大学一年生頃の学生にとっては、書物以上に、授業などで聞いた話に大きな影響を受けることがよ

くある。実際、私自身の経験に照らしても、大学一年のときの授業は今でも断片的ではあるが記憶に鮮明に残っているし、あの当時の授業から自分の歴史への関心も定まっていたことを思い出す。

今回、「連続講演会」を聴いての感想をもう一つ述べれば、同じ史学系の学問とはいつても日本史、東洋史、西洋史、考古学の研究者が一堂に会し、同じ時間に話をする機会は、早稲田大学の文学学術院の授業のなかで他にほとんどないということである。地域を横断し、先史時代から現代まで含めて、過去を探究する学問とは何かを短時間のうちに聴くことは、学生にとり得難い経験となろう。一人あたり十五分から二十分程度の講演の時間は短かいとは思いますが、このような企画が今後も毎年続くことを願っている。

最後に、開催にあたり貴重な授業時間の一部を提供して下さい先生方と、当日の運営に協力していただいた各コース助教、助手の方々に心より感謝の意を表したい。

## 〈第一回〉

### 史料との出会い、学問との出会い

寫田 修

本連続講演会のテーマは「わたしと歴史学、わたしと考古学」ですが、私の場合、歴史学という対象が自明のものではなかったということを、はじめに言っておかなければなりません。つまり私は、はじめから歴史学を志したわけではなく、色々と紆余曲折を経ながら現在に至っているということとです。ならば今日は、わたしと歴史学との関係について、私自身が通ってきた道をそのままお話しすることで、講演会のテーマに近づけられるのではないかと考えました。よって今日は、「わたしと歴史学（との関係）」がどのように作られていったのかということ、自分自身の経験に即して話したいと思います。

私は、学部時代は近代文学を専攻していましたが。但し、文学と言っても、ある作品

の中身を解釈していくこと以上に、文学そのものを成立させている環境・土台、例えば新聞（新聞小説）や雑誌などに興味がありました。ですので、文学研究という点では、自分がやろうとしていることはどちらかといえば主流ではないという状況もあり、それを続けていくことに迷いがありました。

そんな折、当時アルバイトをしていた所が主に歴史の原史料を取り扱う箇所、生の史料をみる機会を持つことになりました。その時私はまだ学部の学生でしたので、原史料を見ることはほとんどない状況です。このように、原史料に触れる機会を持てたことによって、歴史というものに親しみが湧いたということがまずは言えると思います。

しかし、それだけでは歴史学に進もうという決心を持つまでには至らないと思います。当時、右記の仕事の一環でいわゆる文書史料にも日常的に接していたのですが、最初は何が書いてあるのかさっぱり分かり